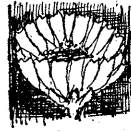


幼児の音楽教育について

— K さんに答えて —



美 田 節 子

お子さんの音楽教育についておたずねですが、貴女のような言
つては失礼ですが余り音楽に興味を持っていらっしやらないと思っ
ていた貴女でさえ、やっと今春から幼稚園にあられた坊ちゃんに
何か音楽を習わしたいからとおっしゃるのですから世の中は変わった
ものだ、と言えば、また何時もの皮肉がはじまったとお叱りを受け
るかもしれませんけれど、実際ここ数年來、小さい子どもの弾くビ
アノやヴァイオリンを聞くたびにづくづく世の中は変わったものと感
心してしまうのです。と言つて何も近頃の子どもが特別にすぐれた
音楽的才能を持つて生まれて来たという訳でもないでしょうから、
つまりそれだけ日本の子どもの音楽教育法がすばらしくなった結果
でありましょう。本当に今の日本の子どもの音楽の盛んな有様には
目を見張る思いがします。ひょっとすると日本が世界で一番子ども

の音楽教育に真剣で熱心であるかもしれません。子どもの音楽教室
と名づくものは全国的に氾濫し、子ども用に特に工夫をこらされた
教則本は次々に出版され、ビアノやヴァイオリンのおさらい会の名
でのリサイタルは、ちょっとした都会なら殆んど毎日のように開か
れています。その為には手頃なホールは五、六か月も前から予約し
ておかなければならぬという程のおすなおすなの盛況ぶりです。そ
のプログラムも十年前にはとても考えも及ばなかったようなむつか
しい曲がずらりと並んでいて、おかつぱの小さいお嬢ちゃんは何々
ヴァイオリン・コンツェルトをバリバリ弾いてのけるのですから、
ただただ感嘆の声をあげるばかりです。

なるほどヨーロッパにもウィーン少年合唱団とか木の十字架合唱
団のような子どもの音楽グループがありますが、これは特別に才能

のある子どもたちを集めて特別な才能教育をおこなったものでいわば子どもの音楽プロなのです。果して一般の欧米の子どもたちの音楽教育はどうでしょうか。ヨーロッパの事情は余り詳しく知りませんが、アメリカでは子どもたちは日本程熱心な音楽教育を受けていないようです。幼児の音楽教育についてはいろいろの面から深く研究されておりますが、そのあり方が日本と違っているようです。日本では、どうしたら子どもが早く上手に有名な曲が弾けるようになるか、どうしたら早く譜が読めるようになるか、どうしたら早く音感がつくようになるかという方面にたいへんな努力が払われているようです。つまり子どもが音楽で何をするかが出来るかということに重点がおかれているようです。しかも日本人はせっかちなのです。早く出来るようになりたいために親も子も白鉢巻で用意ダウンで走り出しているような音楽の勉強ぶりさえ見受けられます。アメリカでは三十五、六年も前にはこうした音楽の技術面や知識面に重点がおかれた時がありましたが、今日では、子どもが音楽で何が出来るかというよりは、一体音楽が子どもに何が出来るかという理念に基づいて音楽教育がおこなわれておりますから、自然、日本とはやり方やあり方が違ってくるのです。

もともと音楽教育とは音楽を通じて成長することであると思います。すべての子どもが持っている音楽性を育成することによって円満な人間に成長することであると思います。よく音楽教育は情操教

育上大切だと言われますが、それ以上に人間教育として欠くことの出来ないものです。音楽を学ぶことによって、身もすこやかになり知力も発達し、暖い豊かな感情に溢れた人間に成長するのでなければなりません。ですから音楽を習った為に高慢になったり、利己的になったり、競走心が強くなって人を押しのけても自分だけいい子になりたくなったり、自己宣伝に憂身をやつすような人間になるのは音楽など勉強しない方がいいのです。これでは音楽による人間の破壊でありますがこんな結果を生ずるような音楽教育を、万一致どもが受けていたらそれこそたいへんなことです。その被害は水爆の被害にも劣らないのです。しかも現在日本でおこなわれているある種の子どもの音楽教育（幸いなことに日本の幼稚園での音楽教育はそうではありませんが）を見ていますと、そんな結果が生じはしまいかとこわくなってくるのです。貴女は坊ちゃんに音楽教育をも併せて受けさししたいとの御意向ですから例を音楽教育にとってみましょう。

音楽教育は日本で考え出された革命的な音楽教育法であることを私は固く信じて疑いません。音楽を学ぶものは誰でも音楽教育を受けねばならぬと固く信じます。しかし実情では音楽教育とは和音や音を覚えさすことであると解されたり、ずいぶんでたらめな方法でやられたりしています。その為に音楽が嫌いになったり、先に言ったような人間性破壊というおそろしい結果となりかねないようなも

のものもあるようです。ある子ども音楽教室では、覚えた和音の数によって子どもをA、B、C、Dなどの等級のついたグループに分け、上のクラスに進むにはテストにパスしなければなりません。その為には子どもの頭にテストに要求されるだけの和音の数をたたきこまねばなりません。そうなるとうう真剣勝負です。その為に音楽教室以外に先生について受験準備をうけたお子さんさえ知っています。

いくら日本の教育の一般傾向が受験準備教育的になってきていると言っても、これは余りひどいではありませんか。また上のクラスに上れない為に劣等感に陥って音楽が嫌いになったお子さんも幾人か知っています。元来日本人はこんな手段を使って刺戟しなくても競走心は強過ぎる位強いのです。それよりもお友だちと仲よしになれるような、みんなで楽しめるような音楽の勉強の仕方が日本の子どもには必要なのです。音感教育は正しい方法でやれば殆んどの子どもが和音や音は自然に聞き分けられるようになるものですが、これはその過程において生ずる副産物なのです。

音感教育とは音楽教育なのです。耳の訓練とは音楽に対して耳を開くことなのです。音やリズムに敏感な反応を示す耳を作ることなのです。開かれた耳からこそ生命のある美しい音楽が創り出されるのです。音は一つ一つ命のある細胞であります。例えばFという音はFの半音高くなった音でなく、全く別のものなのです。そういう個々の音が集って、特異な性格を持つ和音という組織になります。

DFAという和音はDFA[#]という和音とどんなに違ったものであるかはちょっとピアノなりオルガンで鳴らしてごらんになるとすぐにお分りになるでしょう。開かれた耳にはそういう音や和音の微妙な生命が感じられるのです。

前に申しましたように音感教育とは音楽教育でありますから、音楽を離れた音感教育などあり得ないのです。音感訓練の過程そのものが音楽を学ぶ過程でなければなりません。ただ機械的に和音をピアノでたたいてその名前を言い当てさせるのが音感訓練とお思いになつてはたいへんと思つて、少しくどくこの事について申し上げます。

それでは、どんな方法でやればいいのかとお問ひになります。が、その問題に入る前にもう少し、今の日本の子どもの音楽教育がどんなに懐愴な真剣勝負であるかを知っていただく方が必要であるように思われますので、もう一つ違った方面の例を申し上げてみましょう。

昨年の春、私の友人の小さいお弟子さんたちのピアノの会に招かれましたが、会の後でお母様がたが会館の喫茶室にお集りになりまして、私にお子様たちの出来栄について批評をしてほしいとの御注文をお出しになりました。これはえらい事になったと思つていましたら、その中の数人のお母様が思いつめた面持で「あんな弾き方では、とうてい物になりそうに思われませんが、もしそうなら一層ビ

アノをやめさしてしまつた方がいと思ひますがどうでしょうか」とおききになるのです。これには本当に啞然としてしまいました。一体「物になる」とはどういう事でしようかと逆におたずねしたくなりしましたが、その後も同じような質問を受けたことがたびたびありましたが、「物にする」為にお子さんに音楽を習わしていらっしゃるお母様方も相当あるのではないでしょう。そんなお母様はリサイクルでお子さんがちょっとへまをするとう先のようなつきつめた質問をなさるのです。

これがアメリカだつたらどうでしょう。こういうリサイクルに出席したことはたびたびありましたが、子どもがステージで間違つと、間違つた本人も頭をかいて笑い出し、聞いているおとなたちも愉快そうに笑うのです。また、出演した子どもに仰々しい花束を贈るようなことは一度も見うけませんでした。子どもの演奏ぶりも一般に日本の子どもよりずっと稚拙なのです。いわゆる日本の豆タレントのような巧みさはありませんが、下手なら下手なりに、のびのびと自分の音楽を弾いています。これに比べると日本の子どもの音楽は上手は上手でも音楽の盆栽という感じです。早く小さくかたまつてしまつて、空高く枝を伸ばし繁つた葉が風に鳴るような大木に成長しそうにありません。音楽は個人個人の感動の表現ですから五才の子がおとなと同じ表現で、弾いたり歌ったりしてはどうかしているのです。ちょうど節分のお化けのように滑稽です。近頃

日本でも国際音楽コンクールに若くて入賞するような優れた演奏家が現われ初めたのは誠に結構なことですが、だからと言って一般の人々の音楽水準がそれだけ高まっているかといへば、なかなかどう致しまして、と残念ながら申し上げねばなりません。やっぱり運動選手養成と同じようにそれは極く限られた少数の人々の間での出来事で、一般の大衆は「黒い花びら」にうっとりと感じの噴息をもらしているのです。ここにも重大な問題が潜んでいるようです。

さてここで先にちょっとふれました音楽の教育法のことを少し申し上げておきたいと思ひます。それについて一番大切なことは、すべての子どもの立場から考えねばならぬということです。そして子どもの音感覚は白紙であることを覚えていなければならぬということです。それはどんな色にでも染められる白紙なのです。いったん感覚に染めついた色を、完全に消すことは殆んど不可能なのです。最初に間違つた音楽教育を受けるとう取り返しのかね致命傷をうけるのです。だから幼稚園時代の音楽教育が子どもの一生を通じての音楽経験を支配する重大性を持っているのです。この事をくれぐれよくお考え下さいようお願いします。一番の禁物はおとな(その大部分は誤つた音楽教育を受けたものですが)から考えたいろいろの便法を使うことです。と言うのは、すでにある色に染まっているおとなには易しいと思われることが、白紙の子どもには、むつかしいことや負担になることや害になることがたくさんあるか

からです。中には効果的なものもありますが、大体、こうしたらおもしろおかしく譜を覚えるだろうとか、こうしたら早くむつかしい曲が弾けるようになるだろうとか、おとなが考案したものは、かえって子どもに二重、三重の負担となる場合が多いのです。またいい加減な思いつき教育を受けたために、折角持っていた音感が無くなってしまったり、恵まれた音楽性を伸ばそうとしても行き詰ってしまうのは、少し音楽を本気で勉強した人なら、一步退いて考えると明々白々な事柄であります。

ところがおとなから考えてむつかしいと思われることが白紙の子どもには案外何の苦もなく覚えられることもたくさんあります。白紙ですからどの色に染まるのも同じことなのです。その事は、日本の子どもにとって日本語はこの上もなく易しいことばであるけれどドイツ語を覚えるのはたいへんにむつかしいことであり、ドイツの子どもにはドイツ語はこの上もなく易しいことばであるけれど、日本語を習うには四苦八苦の苦痛を味わうでしょうと言ったら、私が言おうとしていることは分って頂けましようか。

音感覚が白紙である子どもはまた素朴で単純であります。廻りくどい工夫は無益で害があります。出来るだけ簡単、卒直、合理的な教え方で、将来子どもの音楽的成長の爲に最も効果的な永続性のあるものでなければなりません。そしてその取り扱い方はどこまでも実際の音楽に即したものであるべきで、単なる譜の読み方や和音の

諸込教育であつてはなりません。それらは音楽そのものを通じて学んでいくべきです。つまり私の言いたいことは、一年間に覚えた和音の数が三つでも四つでも、そんなことは問題でないということです。また一年間かかってハトポッポ一つしか弾けなくてもかまわないうことです。要は音楽の勉強をするということなのです。音楽を感じ得る耳の開かれた子どもの弾くハトポッポを聞くと、楽しくてたまらなくなるでしょうし、その子どもが歌うハトポッポを聞くとお父さんもお母さんもお隣りのお嬢ちゃんも思わず一しよに歌い出してしまふでしょう。またそうして歌っているうちに、和音を三つしか知らないその子どもが何時の間にか低音をつけたリ、デイスカントをつけたリして楽しんで、となるともう日本の子どもの音楽教育も万々才であります。

もっと具体的な事をいろいろお話ししたいとも思いましたが、今日の日本の幼児の音楽教育のあり方、やり方を見ていますと不安でたまらなくなり、坊ちゃんの音楽の勉強をお始めになる前に是非知っていただきたいと思う根本的な問題についてだけ申し上げました。どんな子どもでも何らかの音楽的能力を持っているのです。どうかお宅の坊ちゃんの持つていらっしゃる音楽の芽を、大事に大事に育ててになって下さい。そして音楽と共に「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ」ますますよい坊ちゃんに御成長なさいますようにと祈つてやみません。

(お茶の水女子大学)